

## 【ねこどんぶり】

懐爺がいいます。

「金ちゃん、井って文字は知っていますか」

「しらいでか。いどのいの、まんなかに、てんがはいつとる」

「よくできました。それではどうして、井という文字ができたんでしょう」

「それは、たぶん、いどのなかに、なにかが、おちたんじゃ。そのときに、どんぶり、っておとがしたんじゃ」

「凄い想像力ですね」

「はずれたか」

「当たりです」

「井戸に落ちたのは、【ねこどんぶり】です」

「むむ、ねこのてんぷらを、どんぶりにして、くわすんかのう」

「誤解されやすいですが、もともとは【ねんねこ】という、少年の子守でした。古井戸に落ちたから【ねこどんぶり】になりました」

これからは懐爺の話。

あるとき、目をはなしたすきに、めんどうを見ていた赤ちゃんが、古井戸のなかに落ちてしまいました。

しまったとおもった子守の【ねんねこ】は、古井戸のなかに飛び込んだのです。

「どんぶり」という音が二度もしたので、近所の村びとたちが集まってきました。

そうして古井戸のなかに、太い綱を垂らしました。

ようやく登ってきた【ねんねこ】は、赤ちゃんを手渡すと、力つきてまた「どんぶり」と落ちてしまいました。

それからまた太い綱を垂らすのですが、また力つきて「どんぶり」。

それが何回も、いや何万回も続き、さすがの村びとたちも、これからは一年に一回だけ、赤ちゃんが落ちた記念の日だけに、垂らすことにしました。

いつか【ねんねこ】は、【ねこどんぶり】とよばれることになりました。

時が経って、その赤ちゃんが大人になって、どうしても「命の恩人」である【ねこどんぶり】を救いたいとおもいました。

それで太い綱をたよりに、古井戸の底へ降りて行きました。

「【ねこどんぶり】さんよ、居るかのう」

「いるよ」

とこたえたほうを見ると、気味のわるいおやじでした。

「【ねこどんぶり】さんよ、歳をとったのう」

「そういうきみは、あの子の赤ちゃんかい。赤ちゃんが立派な大人になるんだから、ぼくだって立派なおやじになるよ」

「助けにきたぞい」

「それはすまないねえ。でもさ、ぼくはここが好きで居心地いいから、出ないのさ」

「だども、登ってきては、力つきて、どんぶり」

「あれはさあ、せっかく太い綱を垂らしてくれるんで、まあ誠意として登るんだ」

「誠意かい」

「そう、誠意として登るんだが、井戸の底の魅力には勝てんで、どんぶりだよ」

「誠意よりも、魅力かのう」

「はい」

「だども、どんな魅力があるんじゃ」

「ここには、国も社会も会社もありません。面倒なものはなんにもありませんが、衣住食、なんでもあります」

「なんでもかい」

「はい。この古井戸を塵捨て代わりに使う人が多いですから。着るものはいくらでも落ちてきます。住まいはこの古井戸そのものですし、水や食糧もたっぷりあります。衣住食のために死ぬ苦勞をする外界には、とても出られません」

「ならば、わしも同居させてくれや」

「嬉しい言葉ですが、それはかんべんしてください」

「なぜじゃ」

「ぼくは貧しい子守でしたから、村びとたちも、なんとしてでも助けるということをしません。でもきみはお金持ちの坊ちゃんですから、もしこの古井戸に落ちて出られないとしたりしたら、自衛隊に救助を依頼するにちがいありません。そうして助けた後、この古井戸は埋めてしまうことになるでしょう。衣住食を失ったぼくは、どうやって生きていけばよいのでしょうか」

「なるほどのう」

その後、この男は【ねこどんぶり】のために、古井戸の中へ高価な衣服や高質の蒲団や毛布、豪華なご馳走や旨い酒を長年に亘って入れたそうです。

もうとっくに【ねこどんぶり】が、病気になって死んでいるのを知らなかったのです。

なんでもある古井戸ですが、なにせ医者がいなかったものですから。